

誰の健康改善を優先するのかわにおける「他人の目」の影響
～離散選択実験を用いた人々の選好の分析～

甲南大学 経済学部 森 剛志

京都大学 白眉センター・経済学研究科 後藤 励

要旨

これまで実験経済学では、被験者の利他的な行動が多くの研究で報告されている。その有力な説明の1つが、人は「評判」を気にして行動する、というものである。つまり、人は「他人の目」を気にして利他的な行動をとるというものである。疑似的な「他人の目」の強さについては、顔と顔を合わせる場合から人間の目の写真、インカの神の目や歌舞伎役者の目の絵、単なる3つの黒点があるものまでさまざまであるが、これらの研究では「他人の目」の存在が監視のシグナルとなって働き、利他的な行動を助長していると報告されている。

しかし、これらはすべて実験室の中での被験者の行動分析であって、現実の政策決定で資源配分の問題に対して、「他人の目」がどれだけ関係しているのかわを分析したものは、我々の調べた限りでは存在しない。

分析にあたっては、実際の日本の人口分布と同じような年齢・性別分布のモニターを抽出した全サンプルのうち、無作為に抽出した2割に対して、「他人の目」の絵がある質問票を配布した。

本稿では、「他人の目」の絵がある場合とない場合で、離散選択実験を用いて、健康プログラムの対象者の属性についての選好を推定し、2つの場合で違いが生じるかどうかを考察した。どちらの場合（目の有無）でも全サンプルでは、男性、低所得者、非喫煙者、養育・介助者、若年者を対象とする健康プログラムを優先するという結果であった。しかしながら、目がある場合はプログラム対象者の性別と年齢については、目がない場合と比べて選好に大きな違いが生じた。しかしながら、他の要素については大きな違いは生じなかった。このことは、性別と年齢という要素には人は敏感に反応し、「他人の目」があると自らの選好を意識的あるいは無意識的に変化させる、ということであろう。

性別でみた場合、男性については、目があると男性を優先させる選好度合が大幅に低下した。このことは、三角形の黒点が反転した場合（“∴”）の図柄があった時の方が、男性の被験者がより協調的な選択をするという Rigdon, Ishii, Watabe and Kitayama (2009)の先行研究と整合的である。男性の方が女性に比べて、他人の目があると敏感に反応し、同性への優先度合を低下させると考えられる。